

## 修士論文 論文要旨

研究テーマ：

回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者のうつ状態と身体機能改善との関連

学籍番号：1270024

氏名：川田 尚吾

研究指導教員：江西 一成 教授

研究指導補助教員

### 概要

#### 背景と目的：

脳卒中患者におけるリハビリテーションは重要であり、回復期リハビリテーション病棟においては、脳卒中患者などの日常生活活動能力の改善と自宅復帰の促進を支援し成果を上げている。一方で、脳卒中患者の心理面についての問題は考慮されていないように考えられる。脳卒中後にうつ状態（Post Stroke Depression 以下 PSD）が生じることは 1980 年代から知られており、リハビリテーションを行う上では留意すべき合併症の一つとされている。PSD は、回復期リハビリテーション病棟入院時に該当する発症後 3 ヶ月において最も頻度が高いとされ、PSD がリハビリテーションの効果に与える影響について検討することは重要であると思われる。本研究では、脳卒中患者へのリハビリテーションの経過において、理学療法の立場から PSD の有無が身体機能の変化にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。

#### 方法：

##### 対象

2014 年 3 月から 2014 年 10 月までの期間に、東海記念病院回復期リハビリテーション病棟に入院し、意識障害・失語などの高次脳機能障害・認知症を有さず、2M の経過を追跡可能であった脳卒中患者 13 名（年齢  $68.8 \pm 10.1$  歳、男性 9 例・女性 4 例、罹患期間  $39.8 \pm 13.9$  日）とした。

##### 測定期間

リハビリテーションの実施による身体機能の改善は、一定の期間を要するため、今回は PSD と身体機能の測定時期を回復期リハ病棟入院時とその 2M 後と設定した。

##### 測定項目

PSD の評価には、高齢者用うつ尺度短縮版（GDS）を用いた。身体機能は、運動麻痺の重症度（JSS-M）・非麻痺側膝伸展筋力・ADL 能力（FIM）を評価した。

##### 検討項目

入院時に対象者を GDS の判定基準に従い「うつ有り群」と「うつ無し群」に分類し、初期時における PSD の有無による身体機能の差を確認するために、各身体機能を 2 群間で比較した。また、2M 時における PSD の有無による身体機能の差を確認するために各身体機能を 2 群間で比較し、PSD の有無が 2M 後の身体機能の変化に及ぼす影響を確認するために両群内における各身体機能を初期時と 2M 時で比較した。初期時と 2M 時における 2 群間の比較検討には対応のない t 検定を用いた。ま

た、各群内における初期時と 2M 時の比較検討には対応のある t 検定を用いた。解析には SPSS ver.11.0 を使用し、有意水準は危険率 5%未満とした。

結果：

初期時に GDS にて PSD の有無を判定した結果、うつ有り群は 6 例、うつ無し群は 7 例であった。

#### 初期におけるうつ有り群とうつ無し群の比較

GDS について、うつ有り群はうつ無し群に比べ有意に高値を示した ( $p<0.05$ )。身体機能について、JSS-M と非麻痺側膝伸展筋力は 2 群間に有意差を認めなかったが、FIM ではうつ有り群がうつ無し群に比べ有意に低値を示した。

#### 2M 時におけるうつ有り群とうつ無し群の比較

初期時と同様に GDS はうつ有り群で有意に高値を示した ( $p<0.05$ )。身体機能についても初期時と同様に、JSS-M と非麻痺側膝伸展筋力は 2 群間に有意差を認めなかったが、FIM ではうつ有り群がうつ無し群に比べ有意に低値を示した ( $p<0.05$ )。また、両群内における 2M 後の比較において、両群ともに JSS-M・非麻痺側膝伸展筋力は有意な改善を認めなかったが、FIM は有意な改善を認めた。

まとめ：  
今回、PSD の有無が回復期リハ病棟における身体機能の変化にどのような影響を及ぼすかを検討した。その結果、PSD の有無に関わらず身体機能は、2M のリハビリテーションによって同様に改善することが示されたが、PSD の存在が ADL を低める原因の一つとなっている可能性も考えられた。理学療法を行う上では、脳卒中患者の多くが PSD といった心理的問題を抱えていることを念頭におきながら、他の医療スタッフと共同し、心理的サポートも含めリハビリテーションを進めていくことが重要であると考えられた。